



信州の環境と知に根ざしたESDコンソーシアムの形成

信州ESD通信

No. **37**

2020.12.25

信州ESD
コンソーシアム
事務局

目次：白山エコパークシンポ／ユネスコスクール全国大会／お知らせ

11月15日 「ユネスコエコパークを活かしたESD/SDGsの実践を考える」が開催されました

第1部では「①エコパークとESD/SDGs」として当コンソーシアムの水谷よりエコパークの3つの機能のうち学術支援がESDに相当し、ESDは当該地域活動のキーともなっていると、志賀高原エコパークでの事例を紹介した。「②白山エコパークについて」は地元白山ユネスコエコパーク協議会事務局の和田氏より、白山の特徴とそこでの4県7市村による協議会の組織と活動の紹介があった。多県多自治体にまたがるエコパークの運営のご苦労と国内外との盛んな連携、ネットワーク活動は長野県でも参考になるものでした。「③白山国立公園について」を白山自然保護官の迫氏が国立公園の制度や白山の紹介とともに、エコパークもジオパークも国立公園も国民のためであり協働できるという言葉が頼もしかった。

第2部では「エコパークを活用したESDの実践」として①白山、②志賀高原、③南アルプスの各エコパークでの学校でのESD活動の紹介があった。地元白山の荘川中学校の奥原氏からは小中一貫の義務学校として中学3年生が小学3年生に郷土教育を教えたり地域の方々や大学生や大学教員との連携授業などユネスコスクールとしての多彩な活動が紹介された。志賀高原の地元の南小学校の菅原氏からはESDは当初は負担感や多忙感、抵抗感があったが、これまでやってきたことをとらえなおし楽しむ、と見直すことで「いいこと進んでできるかな：ESD」として取り組むようになったと紹介した。今年は「水」をテーマに全学年で実施し、毎週学内研究会もおこなっており、5年目でかなり先進的な実践であると感じた。南アルプス遠山郷の上村小学校の松崎氏からは、「地域と協同するESD」として地元の伝統の霜月祭りなど「小さな村の世界につながる大きな挑戦」としてエコパークでの学習をWEBで発信しようとするなかで、村のためにできることはと考えごみ拾いや地域交流会などを自主的におこなうようになってきたという。

その後の討論会では水谷氏の司会で、エコパークでのESD実践で子どもたちがどのように変わったかとの問いかけに、荘川中では郷土学習に意欲化がみられた、南小ではゴミなど身近な環境への関心が高まった、上村小ではSDGsが意識化してきた、などそれぞれに顕著な効果が報告された。それらを受けてコメンテーターの北陸ESDコンソーシアムの加藤氏からは、いずれも活動が自分ごととして学び多面的な見方が発信されているのが素晴らしい、東北コンソーシアムの小金沢氏からは、郷土教育は即ESDであり、エコパークとのかかわりを生活圏を意識して実践している、奈良教育大学の松井氏からは、ESDが定着してきたのを感じる、過疎地から街への視点も大事だが豊かな自然の学習を進めたい、など感想やコメントがあった。今回のシンポジウムはオンラインで行われ30名ほどが参加した。発表の資料は本シンポのHPに掲載されているのでぜひご覧ください。

(渡辺隆一)



12月6日 第12回ユネスコスクール全国大会/ESD研究大会が開催されました

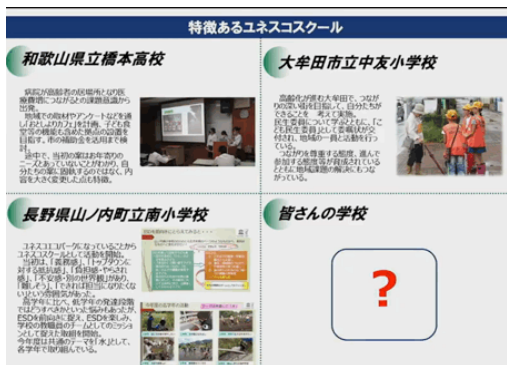
10時よりオンラインで開会し、最初は萩生田文部大臣が登壇し「文科省としてESDとユネスコスクールに期待している」との挨拶ではじまった。次いで俳優で文科省こどもの教育応援大使の香川照之氏が「自然体験は人間形成に必要で、ユネスコスクールやエコパークはESD実践の場だ」と簡潔に述べた。

午前は「ユネスコスクール地方ブロック大会からの報告」で北海道・東北、近畿、中国・四国から各大会の様子が報告された。それぞれオンライン主体による実践報告と討論で、ホールスクールによる各自の生活の見直しから地域を見直すことへ、こども宣言作りによるつながりの形成と誰も取り残さない決意、持続可能なユネスコスクールのために卒業生の学びにつな



がるコースの連携など、長野県にも参考になる多彩な実践例が報告された。

次いで、パネル討論「2030年 - 学校教育のグランドデザイン - 持続可能な社会を構築するためのESD、SDGs、ユネスコスクールの役割」が加藤久雄(奈良教育大学学長)、杉村美紀(日本ユネスコ国内委員会教育小委員会委員長)、浅田和伸(文部科学省総合教育政策局長)の3氏によりおこなわれた。加藤氏は、奈良教育大学は初のユネスコ大学としてESDは教育を大きく変えるものでありユネスコスクールはその拠点として支援している、これからは教育も社会も大きく変わらねばならない、そのために学び続けることが必要であり、それが新しい学びであるESDだ、と。杉村氏は、国際的には「ESD for 2030」と「教育の未来プロジェクト」がありすでにコロナ後の学びとして9提案がなされている、SDGsはコロナ後ではより重要であり特にESD、国内ではその拠点であるユネスコスクールの活性化が求められる、課題として



としては認定後のフォローや学校間の交流が少なく国際・国内の連携強化を委員会としても検討している、と。浅田氏は、まずユネスコスクールの模範3校を示したが、その1校が山ノ内町南小学校であり名誉なことでした。ESDは日本の教育の力が発揮でき、ソサエティ5.0の学びに向かう生きた知識と表現力を養う深い学びであり、校長と学校は何のための教育かを問い直そう、とかなり踏み込んだ提案をされていた。指定討論者からは、ESDで学力が向上する、学校はだれも取り残さない力を地域に開こう、ESDは内向きになるが学校は子どもの姿を通して地域全体をホールコミュニティとしてのモデルになろう、など前向きな補足意見が続いた。

午後は、岡山宣言のコミットメント・提言13項目を分析する3つの観点【観点①】解決方法を探る、行動につなげる、【観点②】各学校の成果等を学校間、地域、国内外へつなげる、【観点③】学校の実践、取り組みを評価し、成果を広める、から以下の3つの実践研究と6つの分科会で課題と展望を探りました。

- 実践研究①は、課題解決のための行動化を促進する、【観点①】、
- 実践研究②は、ESDを深化・発展させるための仕組みと仕掛け【観点②】、
- 実践研究③は、SDGsに基づいた課題研究・探究活動とその評価方法の考察【観点③】、
- 第1分科会は、課題解決に取り組み、行動する児童生徒の育成【観点①】、
- 第2分科会は、ESDを踏まえた学習指導要領の趣旨の実現—2030を目指して【観点①】、
- 第3分科会は、ESDの本質を理解し、魅力を広く社会に伝える【観点①②】、
- 第4分科会は、ESDの実践をどう評価し、活かしていくか【観点③】、
- 第5分科会は、アジアにおけるユネスコスクールを中心としたネットワークの展開【観点②】、
- 第6分科会は、学校・地域社会・行政の有機的連携によるESDの実践【観点②】、

がそれぞれのファシリテーターにより報告者との討論がおこなわれました。参加した実践研究②は岡山大学の藤井浩樹氏による進行で、「岡山県ユネスコスクール高等学校ネットワーク」の紹介が参加の高校生と大学生、その卒業生による動画で発表された。後の高木教員による解説で、このネットには高校生だけではなく、岡山大学生や社会人卒業生も参加することで大きな成果があることがわかった。このネットは2014年の岡山でのユネスコスクール世界会議を契機としてスタートし、発展して、今では県内10校が連携して、生徒と教員それぞれが主体的に通年の活動を実施している。とかく自校のみになりがちなESD活動が大学生、卒業生も参加、連携することで大きく開かれ協奏的に発展してきたという。さらに、その高校の教員が現在は岡山大学のESD推進室のスタッフとしてユネスコスクールと大学をつなぎ、小中高を支援をしているという。長野県でもぜひ見習いたい事例報告でした。

最後に、全6分科会の発表があり、第11回ESD大賞の発表があり閉会となった。信州ESDコンソーシアムにも大いに参考になる大会でした。各報告の概要は大会のHPから見るができますので参照ください。(報告者: 渡辺隆一)



11月27日の信濃毎日新聞に、コンソーシアムの会員であるミールケアの取り組みが掲載されました。長野の高校生が会社を訪問し、SDGsの取り組みを取材した様子が記事になっています。ミールケアは各施設での給食業務をする上で、SDGsを柱として環境や人権への高い配慮や対応を実施していることを紹介しています。ユネスコスクールとの関係はまだ少ないですが今後とも連携を模索していきたい。



お知らせ 2月6日に信州ESDコンソーシアム成果発表&交流会が開催されます。次号で参加、発表校などをお知らせします。

